第十七回

名曲能の会

能

定家

大村 定

狂言

秀句傘

平成二十七年十二月十二日(土) 午後一時開演
(正午開場)

喜多六平太記念能楽堂

東京都品川区上大崎四―六―九
TEL・03(3491)8813

入場券（全席指定）

S席（正面席）	10,000円
A席（正面席）	9,000円
B席（脇・中正面席）	8,000円
C席（二階席）	6,000円
D席（二階学生席）	3,000円

〈お申し込み・お問い合せ〉

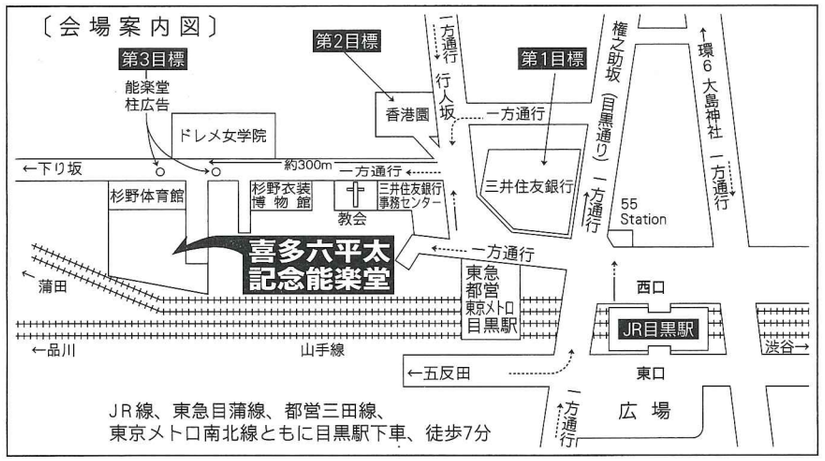
名曲能の会－048(482)0068
喜多能楽堂－03(3491)8813

主　催

名曲能の会

大村　定

埼玉県新座市片山2－11－20
TEL・FAX 048(482)0068



番組

解説　金子直樹

狂言　**秀句傘**　シテ　山本東次郎　アド　山本凜太郎　アド　山本則重

―休憩二十分―

能　**定家**　シテ　大村定　ワキ　森常好　ワキツレ　森常太郎　ワキツレ　則久英志　間　山本泰太郎

大鼓　柿原崇志　小鼓　曽和正博　笛　一噌幸弘

後見　塩津哲生　中村邦生　地謡　金子敬一郎　出雲康雅　友枝雄人　香川靖嗣　長島茂　友枝昭世　粟谷浩之　粟谷能夫

終了予定　午後四時頃

□本日の上演曲

能「定家」

旅の僧が都の千本のあたりで時雨にあい、近くの由緒ありげな建物で雨やどりをします。すると女性が現れて僧に声をかけ、ここは藤原定家が建てた時雨の亭だと教え、荒れ果てた初冬の庭園の夕方に、往事を偲びます。女は僧を式子内親王の墓へと伴い、墓石に這いまつわっている葛を定家葛であると言って、式子内親王と定家卿が人目を忍んで深い契りを結ばれたこと。内親王が亡くなられたあとも、定家の執心が蔦葛となって、その墓にまつわりついていて、二人は今も離れることができず、邪淫の妄執に苦しんでいることを語り、自分は式子内親王の幽霊だとあかし、苦しみを助けてほしいと訴えて消え失せてしまいます。

僧が法華経を読誦していると、内親王の霊が痩せ衰えた姿で墓から現れ、御経の功徳によって定家葛が解けて自由の身になったと喜び、報恩のために舞を舞いますが、姿の醜さを恥じて墓に戻ると、再びもとのように葛に被い隠されて、墓の中に埋もれるように消え失せてしまうのでした。

この能は「定家」という題であるにもかかわらず、定家自身は登場しません。主人公は定家の恋の相手である式子内親王です。品格の高い女の能でありながら、その内面の執心の苦悩をあますところなく表現した作品です。どことなく一抹の悲愁感を持ち、作品の内包している劇的迫力を滲ませています。やつれはてた内親王の姿に、凄参なドラマが浮き彫りにされています。物静かな女の能の美しさと、妄執の地獄絵を見せるかのごとき迫力が同居した魅力がある作品です。作者の金春禅竹は世阿弥の女婿で、本曲をはじめ「野宮」「楊貴妃」「芭蕉」など、華やかさの中に、無常観を漂わせる名作を多く残しています。

狂言「秀句傘」

流行に乗り遅れないために傘張りの男から秀句を習おうと考えた大名ですが、男の秀句が理解できず激怒。今のは秀句だと教えられると、今度は男の言うことを何もかも秀句と思い込み・・・。

所詮、ユーモアのセンスなど、そう簡単に身につけられるものではないのですが、「知らないくせに体裁を繕ってしまう」大名の姿は、どこか現代の私たちにも通じるところがあります。他人事のようには思えない、人間の本質を突いた作品です。

文・金子直樹
画・横尾祐平

□出演者の紹介

山本東次郎（やまもと・とうじろう）＝狂言・秀句傘

狂言方大蔵流。一九三七年、三世山本東次郎の長男として東京に生まれる。父に師事。芸術選奨文部大臣賞、観世寿夫記念法政大学能楽賞、エクソンモービル音楽賞、紫綬褒章を受章。著書に『狂言のすすめ』、写真集に『狂言山本東次郎』ほか。日本能楽会会員。人間国宝。

大村定（おおむら・さだむ）＝能・定家

シテ方喜多流。一九四九年、大村武の三男として広島に生まれる。十五世宗家喜多実に師事。「翁」「道成寺」「石橋」「望月」などを披く。「名曲能の会」および「定会」「稔会」を主宰。喜多流職分会同人。日本能楽会会員。

金子直樹（かねこ・なおき）

能楽評論家。一九五四年東京生まれ。学生時代から能・狂言の普及・評論活動を開始。解説、評論、講演などを中心に活躍中。近著に『能鑑賞二百一番』『狂言鑑賞二百一番』（淡交社）。